

三つ子の魂 百まで

わが国の古い諺に「三つ子の魂、百まで」といふ諺ことわざがあります。“三つ子”とは、今では一般に“幼児”の意味に使はれてみて、この諺の意味は「幼い時に身についた性質は一生変らない」といふ意味です。しかし、“三つ子”とは、本来は“3歳の子供”といふ意味の言葉です。実は、近年著しい発達を遂げた大脳生理学では、「3歳といふ時期は、一生のうちでも特に重大な意味のある時期である」といふことを明らかにしてあります。それで私は、この諺の“三つ子”を文字通り“3歳児”と解釈したいと思ひます。

そもそも人間が他のいかなる動物とも非常に異ってゐる点は“大脳”であります。大脳は、記憶・理解・認識・創造など、人間特有の精神活動を司る所であり、人間の頭脳の中ではずば技けて大きな脳である所から“大脳”と呼ばれたものです。しかし、それは人間だけが大きいのであって、他の動物では高等動物でも小さく、下等動物に至っては小脳はあっても大脳は無いものがあります。だから、「人間の人間たる所以は大脳の働きにある」と言ふことが出来ると思ひます。

この“大脳”は、生れたばかりの時にはほとんど未完成の状態にあって、環境から刺戟を受け取り、これに反応することによって発達して行く

ものである、といふことが今は明らかにされてゐます。しかし、20年間にわたる大脳の発達は一様なものではなく、生後の3年間の発達がとりわけ著しく、その60~70パーセントまでが3歳までに出来上るといふことです。その後、十歳位までに95パーセントが出来上り、あとは極めて徐々に徐々に成熟に向ひ、20歳で100パーセントに達するのです。

つまり、人間は生れて3歳までの間に、その人の精神活動を司る大脳の大半が出来上るのでから、「三つ子の魂、百まで」といふ昔の諺は、最新の科学に照しても真理を衝いた諺であるといふことが出来ませう。そして一生のうちで最も大切な3歳までの間の教育は、学校教育の盛んな現代でもやはりその大部分が家庭で行はれてゐることを考へ合はせると、形の上では今でも「一生のうちで最も重要な時期の教育は家庭で行はれてゐる」といふことになるのです。ただ、現実には、今の家庭はその実を失って居り、しかもその自覚が無いのです。そこに問題があります。